

# 火伏せの神「愛宕」の由来 —日本三大愛宕を巡って



消防大学校長 山崎 一樹

愛宕神社といえば「火防の神様」である。京都を舞台としたドラマで京町家の台所（通称「おくどさん」。「竈のあるところ」の意。）に「阿多古祀符・火迺要慎」（ひのようじん）というお守り札が貼ってあるシーンに気がつくのは消防人だけではないだろう。京都に住まう人々にとって「火の用心」とは当にこの護符のことである。全国の消防人にとっても「愛宕」といえば格別の意味を有するものであろうが、はてさてその由来や如何？

愛宕神社は全国に900とも1,000ともいわれるほど多数存在しているが、確認されたところでは43の都道府県に祀られているとのこと。つまり、全国の9割を超える地域に「愛宕」が祀られているということであり、このことは愛宕信仰の広がりの一部の地域に限られたものではないことを示している。全国的な広がりを見せている大きな理由は、愛宕神社の祭神が「火伏せの神」として広く厚く信心の対象となってきたからに他ならない。

全国の愛宕神社の祭神は多くの場合、迦具土命（カグツチノミコト）や伊邪那美命（イザナミノミコト）である。記紀神話によれば、カグツチはイザナミとイザナギとの間に生まれた「火の神」（火産霊）であり、生まれた時に母親であるイザナミを焼死させてしまったとされる。この故に「仇子」（あたご）と呼称され、それが「愛宕」の語源となったという説がある（本居宣長『古事記伝』）。この説によれば、「愛宕」は火山の噴火のイメージが語源ということになり、そもそもが火に由来する神であることが窺われる。ちなみに余談までに、パズドラ好きの向きは火の神・カグツチの現代に蘇った姿をご存知であろう。

一方で、民俗学的には「愛宕」は「背面」もしくは「日隠」の意味を持つ「あて」という場所のイメージから派生したのが語源であるとの説もある（柳田国男『地名の研究』）。京都市の西北に鎮座する愛宕神社は全国の愛宕神社の総本社であるが、愛宕の神は本来「境界の神」（塞の神）であり、東の比叡山、西の愛宕山に、境界の内すなわち京都の街を鎮護するために配所され、とりわけ愛宕神社には火伏せの神として祀られたというのである。

そもそも京都の愛宕山は修験者の聖地であり、中世（701年頃）に愛宕神社が建立され、それら修験者が全国に展開して愛宕信仰を広めたと伝えられる。その際、愛宕の神を各地の小高い山や丘に観請したことから「火伏せの神」として広く庶民の信仰を集めることとなり、全国に防火・鎮火の神として信仰が広まったという説である。かくして愛宕山は全国各地に所在するに至ったというわけである。例えば柳田国男の『遠野物語拾遺』第64話には、遠野の城下町の境界に位置する愛宕神社の火防にまつわる逸話が収録されている。

その一方で、愛宕信仰は武士には「勝利の神」として祀られてきた歴史的事実がある。その代表例が東京の愛宕神社である。標高26メートル、23区内で最も高い自然の山である愛宕山に1601年、徳川家康の命により「勝軍地藏菩薩」を観請したのが始まりであり、勝利の神が転じて火防の神様として、江戸の防火の拠り所となるとともに、各藩武士が参勤交代の際にこれを地元を持ち帰り、各地に愛宕神社を祀るようになったとの説である。

いずれの伝搬説を採るにせよ、「愛宕」が「火伏せの神」として広く日本全国各地で信仰の対象となったことは間違いがない。そのような各地に展開する愛宕神社の中で京都、東京と並んで「日本三大愛宕」を呼称するのが福岡市西区に所在する鷲尾愛宕神社である。1634年に黒田家2代当主黒田忠之が愛宕権現の霊験により黒田騒動を乗り切ったことに感謝して、標高68メートルの愛宕山に京都の愛宕神社から観請したのが始まりとされる。

筆者はかつての勤務地と所属の関係もあって、「日本三大愛宕」のいずれにも参拝した経験を有する。標高924メートルの京都愛宕神社はさすがに登山スタイルでないと厳しいが、他の二つは健脚揃いの消防人であれば散歩がてらの参拝も可能なので、ご興味のある向きは「日本三大愛宕」の踏破にチャレンジされてみては如何だろうか。